

里山での自然体験活動の計画的な実施



実施担当者 古河市立上大野小学校
教諭 太田 俊彦

1 はじめに

本校は、全校児童 81 名の小規模校で、「徳・知・体の調和のとれた人間性豊かで行動力のある児童の育成～やさしく かしこく たくましく そして かがやく～」を学校目標に、日々の教育活動を実践している。本校学区内は豊かな自然環境に恵まれており、身近な自然に触れ合いやすい環境にある。しかし、近所の雑木林に入ったことがない子どもや、生き物に触れられない子どもも多く見られる。その一方で、高学年ともなると森林伐採や地球温暖化など、地球規模的な環境問題のキーワードについては、メディアを通じてよく知っている。足元の自然については知らないのに、地球規模の環境問題を口にしてしているのが現状である。

本校の学区内には、NPO 法人「こが里山を守る会」が管理をする里山があり、本校は自然体験活動をするには恵まれた環境にある。この団体との連携を十分に深め、里山を生かし豊かな自然体験活動を実現していこうと考えた。そうした体験を通して子ども達の自然に対する興味・関心高めることが郷土とその自然を愛する子どもを育てることにつながる。またその過程で、科学の基本である課題の発見・解決のための思考・観察実験・考察などの一連の流れを体験し、科学の楽しさを味わうことを狙った。さらには、身近な自然を入り口として世界的な環境問題について実感を伴って考えられる人を育てたいと考えて実践を積み重ねてきている。

2 活動の実際

2-1 低学年（小学1・2年生）の取組

6月「スズメバチ捕獲器(生活科)」

9月「栗拾い(生活科)」

10月「サツマイモ掘り(生活科)」



1・2年生は、生活科の学習として年3回の活動を実践している。6月には里山探検とスズメバチ捕獲器の取付、9月には生き物探しと栗拾い、11月には山遊びとサツマイモ掘りを行っている。低学年は、里山に親しむ時期と位置付け、様々な遊びや体験を通して、里山の自然を感じることに主眼を置いている。

2-2 中学年（小学3・4年生）の取組

6・7・12月「生き物調べ(理科・総合的な学習の時間)」

中学年は、6月（初夏）、7月（夏）、12月（冬）の年3回の生き物探しを行うことで、季節毎に林の様子や見られる生き物の違いに気付いたり、ムシの体のつくりの違いを理解したりすることをねらいとしている。

春にはまだまだクワガタが見られなかったが、カブトムシの幼虫を多く見ることができた。そして冬の雑木林は、生き物がいなくて寂しいと思われがちだが、冬越しをしている生き物は子どもの予想以上に多い。事前指導のときに、スズメバチは女王バチだけが生き残り、1匹で冬越しをすることを写真を見せながら話したところ、子どもの関心はとても高まった。スズメバチの女王バチの冬越しを見付けるのは興味深いことであるが、あまり動かないとはいえ刺される危険もあるため、事前指導で十分に注意をするよう指導した。



そして、里山での活動では、スズメバチの女王バチやカブトムシの幼虫、クワガタの成虫を朽ち木の中で、他にもムカデやナナホシテントウ、ナナフシなどをたくさん見付けることができた。それぞれの生き物が、卵、幼虫、成虫のどの姿で冬越ししているのかを理解することができた。普段見ることのない様子を観察することができるので、暖かい時期の生き物探しよりも興味深いようであった。

カブトムシの幼虫は、教室で飼育するために大量の腐葉土とともに数匹だけ持ち帰ることとした。

2-3 高学年（小学5・6年生）の取組

5月中旬「山菜で天ぷら(理科・総合的な学習の時間)」

里山にて自分で山菜を採集し、それを天ぷらにして食べる活動を行った。この活動は、危険も伴うことから、NPO法人「こが里山を守る会」、保護者の方々にも協力をいただき、実践した。さらに、植物専門の講師を招聘し、山菜採集についての注意やその見分け方について指導してもらった。この活動を通して、身近な食材や食に関する興味・関心を高めることをねらいとしている。

今回は、学習の中で食べることをするため、絶対に間違いが起こらないように慎重を期し



た。まずは、採集の対象とした植物は、コバギボウシ、ツリガネニンジン、ノビルの有名な山菜である 3 種類に限定し、子どもの不安を取り除く意味でも事前指導を行った。ノビルは、スイセンと誤って食中毒を起こしてしまう例も後を絶たないため、その見分け方については、100%自信がない場合には口にしないことも十分に念を押して指導した。子どもの採集したものは、本当に安全かどうかを講師と里山スタッフ、教師がチェックすることとし、安全のために配慮することとした。

2月下旬

「シイタケ植菌(総合的な学習の時間)」

里山で伐採したコナラの木にシイタケの植菌活動と、木を伐採して林の開けたところに苗木の植樹を行った。この自然豊かな里山を存続させるためには、老木を伐採し、新しい木に更新していくことが必要不可欠であることを事前に学習した。そして本時では、植樹と伐採した木もキノコ栽培に有効利用できることを実体験を通して学ぶことをねらいとしている。



2-4 教室での生き物の飼育, 観察

各教室に水槽を設置し、生き物を身近に観察することができる環境をつくった。学校や里山で採集した生き物で飼育が可能と判断した場合には、教室で飼育し観察した。理科室では、大型水槽で学区内で採集した身近な魚を飼育していることを始め、収穫したものや、興味を引くような自然物を自由に触れる形で展示している。



2-5 「里山観察会」への参加

学校での授業での連携の他にも、「こが里山を守る会」が休日に開催するイベントにも学校として積極的に参加するよう努めてきた。

5月中旬の日曜日に行われた「こが里山を守る会」主催のイベント「里山観察会」では、全校児童に参加をよびかけた。そこでは、雑木林の中をトレーラーを改装したタクシーに乗って巡ったり、子どもがコンサートに参加して校歌を歌ったりした。本校は、スポーツ少年団に所属している子が多く、参加した子ども達は25名にとどまったが、聴衆からアンコールもいただき、元気な歌声を林内に響かせることができた。



3 まとめ

(1) 子どもの自然への興味・関心の高まり

里山をはじめとした身近な自然環境において、自然体験活動を取り入れた学習を实践したことにより、一人一人の子どもがその子なりに自然に対して興味を示し、身近な生き物に対する興味・関心が高まることが実感できた。それは、次のような子どもの姿からである。

- ・不思議に思ったことをインターネットや本を使って進んで調べる姿が、よく見られるようになったこと。
- ・1・2年生が、校庭の芝生や池でバッタやアメリカザリガニを捕まえる姿が目立つようになった。また、生き物を見つける目が育ってきていることが分かるようになったこと。
- ・3・4年生が里山で初めて生きもの探しをしたとき、最初はどやどや探したらよいか戸惑っていた子が多かったが、次第に生き生きと活動する姿が見られるようになったこと。
- ・3・4年生の生きもの探しが2回目ともなると、対象とする生き物の生態から、探し方を工夫して行えるようになったこと。
- ・3・4年生の生きもの探しを継続することで、生き物の種類を季節や気温の変化と結びつけて考えることができたこと。

(2) 地元意識と自然環境保全への関心の高まり

子どもにとって里山は、今までは学区内にある身近な場所だったが、低学年の時にしか活動しない場所だったといえる。しかし、里山で様々な体験活動を学校教育活動の中で行うことを通して、地元の人達との交流が深まり、身近に感じる場所に変化してきたといえる。それは、子どものワークシートの次のような記述からいえる。

- ・里山は、自然豊かなので、残ってほしい。そこで、もっと里山のことを知りたい。
- ・里山は、たくさん動物や植物がいるから、なくならないでほしいです。
- ・身近で、いつでも自然を感じられる場所であってほしいと思います。
- ・今ゴミだらけの林も、きれいな里山になってほしいです。そうすれば、自然にふれあえる大切に場所になるからです。

(3) 自然を大切にしようとする意識の芽生え

今までの取組を通して、本校の子どもに見られた変容した姿から、自然を大切にしようとする意識が次第に芽生えてきていることがうかがえる。

- ・朝登校してくると、学年・学校花壇の草取りや、花壇の植物への水やりをする子どもがとても多く見られるようになったこと。
- ・各教室で飼育している動物の世話をしたり、定期的に観察したりする姿が見られるようになってきたこと。
- ・自分たちが世話をしている動物が死んでしまったとき、悲しんだり、手厚く土に埋めてあげたりする子どもが、以前よりも多く見られるようになったこと。

謝 辞

本校での取組を進めるに当たり、公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団から助成していただきました。厚く御礼を申し上げ、感謝する次第です。

以上